

JＡ全農ちば 営農情報集 3月号



今月の情報

1. 水稲作のポイント 種粃の播種と育苗管理について
2. 園芸野菜 病虫害防除情報
3. 果樹(ナシ)病虫害防除情報
4. 土壌診断のススメ
5. 安全な農作物生産の取り組みについて
～改善をつづけるために～

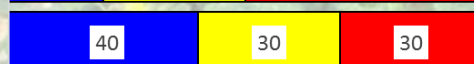
3月の気象について（気象庁 3/3 発表 長期予報（1か月）から）

1. 3月は気温が高く推移する予報となっています。また、降水がやや少ないため害虫の発生しやすい条件となります。圃場の様子を良く観察し、早期防除に努めましょう。
2. 桜の開花予想は平年並みとなっており、昨年よりは遅くなる見込みです。

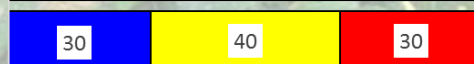
【気温】



【降水量】



【日照時間】



凡例 ■: 低い ■: 平年並 ■: 高い

（長期予報は毎週木曜 14 時 30 分に発表されます。週予報とともに確認し今後の栽培管理の計画を立てましょう）



<農薬の残留に注意！>

- ①農薬の使用基準は守りましょう！
- ②周囲への農薬飛散「ドリフト」対策を行いましょう！
- ③散布器具は毎回しっかりと洗浄しましょう！
- ④農薬散布記録簿への記帳は忘れずに！

注意とお願い

農薬登録内容は掲載時点の情報です。農薬を使用する際に必ず最新の登録内容をご確認ください。

水稻作のポイント

種粃の播種と育苗管理について

J A全農ちば
営農支援部

種子の配布も始まり水稻作付けがいよいよスタートします。

種子に関しては、低温貯蔵種子を利用する際は、休眠が深くなっている場合がありますので、浸種作業は注意して行いましょう。

近年、気象が極端化しています。「突発的な高温・低温」に注意をしましょう。

また、播種や植え付け時期の早限を越えると、冷害の危険性（特に植付の早い早生品種や低温に弱い品種）がありますので、適期播種・適期植え付けをしっかりと守り、良質な苗の移植を心がけましょう。

1. 稚苗移植の播種・植え付け時期及び出穂期の早限

各品種の耐冷性を考慮した播種・植付の早限は下記のとおりとなります。

品 種 名	地 域					
	安房・東京湾岸南部			その他の全域		
	播 種	植え付け	出穂期	播 種	植え付け	出穂期
ふさおとめ ふさこがね コシヒカリ 粒すけ	3月20日	4月15日	7月15日	3月25日	4月20日	7月20日

※稲作標準技術体系（千葉県・千葉県農林水産技術会議）より抜粋

※出穂期はコシヒカリ・粒すけの基準

2. 種子消毒について

種子伝染性の病害である「ばか苗病」・「いもち病」・「細菌性苗立枯（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）」などの発生を防ぐために行います。

種子伝染性病害の多くは、種粃の周りや内部に侵入した病原菌が、育苗箱中に発生するため、事前の種子消毒による防除が重要です。

※種子消毒の動画を全農ちばホームページにて公開中です。

種子消毒剤及び使用方法

- ・ヘルシードTフロアブル 200倍24時間浸漬
- ・テクリードCフロアブル 200倍24時間浸漬

※薬剤浸漬の水温は10～15℃で実施しましょう。

極端な高温・低温は薬害、効果不足、発芽不良などが起こりやすくなります。

3. 浸種について

浸種は発芽を揃えるため、積算水温 100℃を目安に(水温 10℃で 10 日間)水に漬け、種子を十分に吸水させましょう。また、配布された種子で保証票に「低温貯蔵種子」の表記がある場合は浸種を長めにとりましょう(例：水温 10℃、12 日間、積算水温 120℃)。

種子消毒の効果を高めるために、浸種後 3 日目までは水の交換はせず、4 日目以降に水を交換しましょう。

種子消毒・浸種・催芽スケジュール例

一般種籾の場合	低温貯蔵種籾の場合	エコホープDJ使用の場合
種籾消毒 (24時間浸漬) ↓ 陰干し (1日間) ↓ ※浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 催芽・は種	種籾消毒 (24時間浸漬) ↓ 陰干し (1日間) ↓ ※浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 催芽・は種	種籾消毒 (24時間浸漬) ↓ 必要なし ↓ ※浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (3日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 水交換 ↓ 浸 種 (2日間) ↓ 催芽・は種

※浸種 4 日目以降は、毎日水交換を行っても良い。(浸種水温の上昇を防ぐ・空気供給のため)

※微生物資材 (エコホープDJ など) を使用する場合、種子消毒後に風乾 (陰干し) しない。

4. 培土消毒・播種

培土消毒は育苗中に発生する苗立枯病 (カビ) や、細菌病を予防するために行います。

使用薬剤及び使用方法 (フタバロンA粉剤を利用する場合)

- (1) 播種前の床土への灌水はタップリと行いましょう。
- (2) 薬剤と育苗用土の混和は、使用量をきちんと守り、播種 7 日前～播種直前に実施しましょう。(培土 20 リットルに対して「フタバロンA粉剤」100 g を均一に混和)
- (3) 薬剤は「**覆土**」のみに行いましょう。
- (4) 播種直後の覆土への灌水は行いません。

また、床土の灌水と、播種後の覆土が少ないと「根上がり」しやすくなるので注意しましょう。

育苗箱に発生する苗立枯病の種類と病徴及び発生条件

病原菌	病徴	発生条件	薬剤名
リゾープス菌	箱の表面全体に白～灰色のカビが広がる。	出芽時の高温(35℃以上)・多湿	ナエファインフロアブル ダコレート水和剤 ダコニール 1000
フザリウム菌	艍の周りに白～ピンク色のカビが生じる。	播種後の低温及び乾燥と過湿の繰り返し	ナエファインフロアブル ダコレート水和剤 タチガレエースM液剤
トリコデルマ菌	地際部に白カビが生じ、その後青緑色カビに変わる。	出芽時の高温(30℃前後)	ダコレート水和剤
ピシウム菌	坪枯症状をおこす。萎凋し下葉から褐変枯死する。	緑化期以降の低温	ナエファインフロアブル タチガレエースM液剤

※農薬を使用する際は登録内容を再確認しましょう。



リゾープス菌（白色）



フザリウム菌（ピンク色）



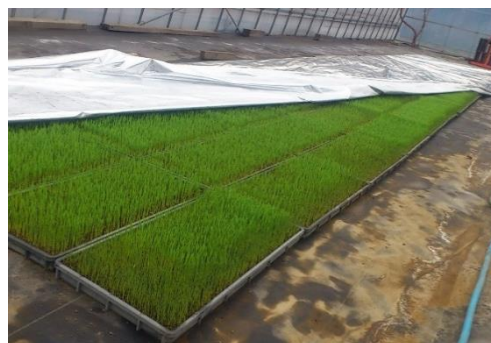
トリコデルマ菌（緑色）

5. 育苗時の温度管理

水稻の平置き育苗は播種後～出芽まで昼間 20～30℃、夜間 10～20℃の温度の確保が必要です。しかし、3月下旬の播種は育苗時に低温になる期間が多く、出芽の遅れや病気が発生するリスクが高くなります。健苗育成のために、被覆資材で保温し温度管理をしっかりと行いましょう。

「太陽シート」は、被覆内の日中の高温防止と夜間の保温を同時に行い発芽適温を保つ資材で、緑化期までのハウスの換気作業を軽減することができます。ただし、低温期の保温効果が低いため、ハウス内が 10℃以下になることが予想される場合は、太陽シートの上、または下に手持ちの被覆資材で2重掛けを行い、保温に努めます。

また、播種後、太陽シートを被覆する際に、ハウス内および地温を高めておく事で、保温効果を発揮させることができます。



太陽シート利用の様子

園芸野菜 病虫害防除情報

J A全農ちば
営農支援部

1. はじめに

春夏作物の準備時期となりました。3月は気温が高く、降雨がやや少ない予報のため、害虫が発生しやすい条件となります。圃場の害虫発生状況をよく確認し、早期防除に努めましょう。

2. 各作物苗床（苗立枯病）

主にピシウム菌やリゾクトニア菌が原因で、育苗初期に発生し茎の地際部付近が腐敗します。子葉から上の葉が正常なまま倒れてしまうことが多いです。菌によって症状が異なりますので、それぞれに対応した薬剤を選択しましょう。また、高温多湿条件で発生しやすいので、過度な灌水や換気の遅れ、密植管理には注意しましょう。

ピシウム菌被害の特徴：地際付近が褐色に変色し、軟らかく軟腐状になる。

リゾクトニア菌被害の特徴：褐色に変色し、くびれて細くなる。

（左）ピシウム菌被害（右）リゾクトニア菌被害



○苗立枯病 防除薬剤例（使用時は各作物の登録内容をご確認ください）

対象病害	FRACコード	薬剤名	備考
苗立枯病	M4	オーソサイド水和剤80	散布または 灌注処理
苗立枯病（リゾクトニア菌）	M5	ダコニール1000	
	14	リゾレックス水和剤	

3. スイカ（うどんこ病）

うどんこ病は苗床から持ち込んでしまうこともあります。株元、特に子葉から発生するので、発生初期を逃さないように注意しましょう。明らかな被害が出ている苗は使用を避けるか、定植後に下表の治療剤による防除を行いましょう。定植後はベルコートフロアブルでの予防を基幹として、ミツバチ導入後などしばらく防除が行えない時期は必ず事前に防除を行いましょう。



うどんこ病被害

○スイカ うどんこ病 防除薬剤

対象病害	FRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	備考
うどんこ病	M7	ベルコートフロアブル	1000	収穫前日	4回以内	予防
	3	トリフミン水和剤	3000～5000	収穫前日	5回以内	予防・治療
	3+U6	パンチョTF顆粒水和剤	2000	収穫前日	2回以内	予防・治療

※パンチョTF顆粒水和剤はトリフミンと同成分を含むので総使用回数に注意

4. トマト・ナス（葉かび病・すすかび病）

下葉から発生しますが、感染から発病まで14日ほどかかるため、現在発病している葉の数段上まで感染の危険があると考え、早めに対策を取りましょう。葉かきでの直接除去や、薬剤散布の場合は予防剤・治療剤の選択に注意が必要です（予防剤は感染前でないと効果を発揮できません）。気温20～25℃、湿度90%以上で発生しやすくなるので、特に湿度対策（換気）には注意しましょう。



○トマト 葉かび病・すすかび病 防除薬剤

対象病害	FRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	備考
葉かび・ すすかび病 (アミスターは 葉かび病 のみ)	M7	ベルコートフロアブル	2000～4000	収穫前日	3回以内	予防
	7	アフェットフロアブル	2000	収穫前日	3回以内	予防
	11	ファンダス顆粒水和剤	2000～3000	収穫前日	3回以内	予防・治療
		アミスター20フロアブル※1	2000	収穫前日	4回以内	予防・治療
		トリフミン水和剤	3000	収穫前日	5回以内	予防・治療

○ナス すすかび病 防除薬剤

対象病害	FRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	備考
すす かび病	M7	ベルコートフロアブル	2000	収穫前日	3回以内	予防
	7	アフェットフロアブル	2000	収穫前日	3回以内	予防
	7+11	シグナムWDG ※1、2	1500～2000	収穫前日	3回以内	予防・治療
	11	アミスター20フロアブル※1	2000	収穫前日	4回以内	予防・治療
	3	トリフミン水和剤	3000	収穫前日	5回以内	予防・治療

※1 アミスター、シグナムは薬害発生回避のためニーズ等の展着剤の混用は避け、基本的には単用が望ましい。

※2 シグナムWDGはカンタスドライフロアブルの成分が含まれるので成分総使用回数に注意。

5. ニンジン(トンネル栽培) (ヒョウタンゾウムシ)

ヒョウタンゾウムシの多くは、圃場外から侵入して畝内へ入ってきます。マルチの隙間や土の塊の下に潜っていることが多いです。トンネル除去前後の発生状況を確認しつつ、成虫防除としてコテツフロアブルの散布を行いましょう。散布はニンジン株元や畝全体によくかかるよう行いましょう。



ヒョウタンゾウムシ成虫（左）と幼虫（右）

○ニンジン ヒョウタンゾウムシ 防除薬剤

対象 病害虫	IRAC	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	備考
ヒョウタン ゾウムシ類	13	コテツフロアブル	2000	収穫前日	2回以内	成虫防除剤
	22B	アクセルフロアブル	1000	収穫前日	3回以内	成虫防除剤

果樹(ナシ) 病害虫防除情報

J A全農ちば 営農支援部

1. はじめに

今年の桜の開花予想時期は平年並みとなっています。【桜開花予想（3月3日現在）：東京3月23日（平年3月24日）・銚子3月29日（平年3月30日）】昨年は平年よりかなり早かったため、今年のナシの開花時期は昨年よりは1週間ほど遅くなることが予想されますが、花芽の様子や気象状況はよく確認し、作業が遅れないよう注意してください。

2. 黒星病



防除適期はりん片脱落期直前（3月下旬）から交配終了後（4月中下旬）までです。
適期を逃さず防除して下さい。

(1) 耕種的防除

- ①芽基部に発病が見られた場合は基部から切除してください。
- ②黒星病が発生した落葉からは黒星病の胞子が飛散し、伝染源になります。園内に残っている落葉等は土中に埋めるか、園外に持ち出してください。

(2) 薬剤防除（黒星病対策）

①催芽期～発芽期 花芽の防除 3月中旬～下旬

- ・オーソサイド水和剤 80 による臨機防除 1000倍（収穫3日前まで／9回以内）

★★★ 催芽期～発芽期の防除時期の目安 ★★★

長果枝先端部のりん片がゆるんできた頃が目安
見えている中の部分に農薬をつけることが狙い



左防除時期目安 ・ 右ここまで開くとオーソサイド散布には遅い

- この防除は秋防除の延長線にあり、芽基部病斑の防除が目的です。防除可能な時期が短いので、特に黒星病多発園や昨年の秋防除が不十分だった園で散布を行うか検討してください。芽基部発病芽を減らし、その後3月下旬の防除へつなげましょう。
- オーソサイド水和剤 80 使用時の注意点
 - ・前剤にオイル剤が使用されていた場合、10日ほど間隔を空ける必要があります。（薬液が付着しにくい）
 - ・展開葉部分にオーソサイドがかかった場合、葉先薬害（黒斑点）が生じる可能性があるため、写真右の時期までに散布を行いましょう。

農作業安全 ハウス建設の事故、ハシゴからの転落注意！ 食の安全安心 農薬使用後は必ず記録簿へ記載しましょう。

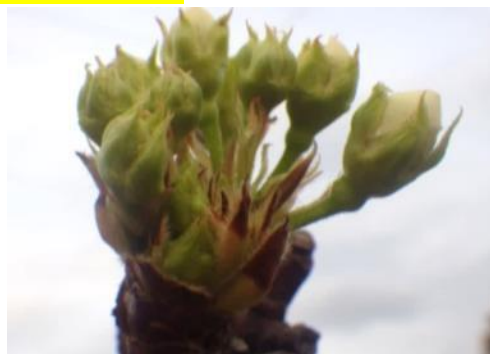
※ 本資料の無断使用・複写・転載を禁じます JA全農ちば

②りん片脱落期（3月下旬頃～）

- ・デランフロアブル1000倍（収穫60日前まで／4回以内） または
トレノックスフロアブル500倍（収穫30日前まで／5回以内）

★★★ りん片脱落期の目安 ★★★

早い品種の花
芽がこれくら
い開いてきた
ら防除



③りん片脱落終了後～開花直前（4月上旬～4月中旬）

- ・マネージDF6000倍（収穫21日前まで／3回以内） または
アンビルフロアブル1000倍（収穫7日前まで／3回以内）

- ＋ トレノックスフロアブル500倍（収穫30日前まで／5回以内）
- ・混植園の散布目安は、開花の早い豊水や新高のりん片脱落終了後～開花直前です。

④【臨機防除】開花中 長雨や気温の影響等で開花が長引く場合

- ＋ トレノックスフロアブル500倍（収穫30日前まで／5回以内）
（散布当日は受粉作業を行わない）

④交配終了後（4月下旬）

- ・スコア顆粒水和剤4000倍（収穫14日前まで／3回以内）
- ＋ トレノックスフロアブル500倍（収穫30日前まで／5回以内）

3. アブラムシ類



アブラムシ被害



脱皮した抜け殻

ナシアブラムシ

3月下旬以降アブラムシが飛来し、展葉期頃から葉が縮れ内側に巻くような被害が現れます。

薬剤防除

①りん片脱落終了後～開花直前（4月上旬～4月中旬）

- ウララDF 2000倍（収穫14日前まで／2回以内）

②交配終了後（4月下旬）

- バリアード顆粒水和剤 4000倍（収穫前日まで／3回以内）
（シンクイムシを同時防除する場合は2000倍で散布して下さい）

農作業安全 ハウス建設の事故、ハシゴからの転落注意！ 食の安全安心 農薬使用後は必ず記録簿へ記帳しましょう。

※ 本資料の無断使用・複写・転載を禁じます JA全農ちば

4. ニセナシサビダニ・チャノキイロアザミウマ

3月中旬以降に発生し、新葉・新梢に寄生します。どちらも新葉へ移動していくので新梢が伸びるにつれて園の上部へ移ってしまい、薬剤がかかりにくくなりますので、開花後から5月にかけての初期防除が重要です。

サビダニ・アザミウマのどちらが問題になっているか確認し、対応する薬剤防除を実施しましょう。モベントフロアブルはアブラムシ防除も兼ねます。

またハチハチはミツバチへの影響、モベントは浸透移行性の特性を発揮するため、交配終了後（ハチの心配無し・葉の展葉が進んだころ）からの使用が適切となります。

- （1）サビダニ：落葉を生じますが、近年では葉のモザイク症状が目立ちます（右下写真）。
- （2）アザミウマ：葉裏が褐色になり、落葉が生じます。被害が目立つのは6月頃からで、サビダニに比べ葉が縦に折れるように曲がります。



薬剤防除

①4月下旬（交配終了後・モベントは新梢展葉の確認後）

対サビダニ：モベントフロアブル 2000倍（収穫14日前まで／3回）
 対アザミ：ハチハチフロアブル 2000倍（収穫30日前まで／1回）

②5月中旬

コテツフロアブル 2000倍（収穫前日まで／3回以内）

5. ナシマルカイガラムシ 他カイガラムシ類

主に枝に寄生し吸汁加害をします。発生密度が高いと果実表面に寄生するため、商品価値を低下させます。発生密度を抑えるためには春先のマシン油散布が重要になります。またマシン油散布は、カイガラムシ類の他にもハダニ類やニセナシサビダニの防除も兼ねます。マシン油は虫本体に付着しないと効果を示さないため、発生している樹には散布ムラがないように枝の上面にも散布しましょう。



ナシマルカイガラムシ多発枝 吸汁被害



ナシマルカイガラムシによる果実被害

薬剤防除

3月上旬：マシン油乳剤の登録上、散布は発芽前までなので注意

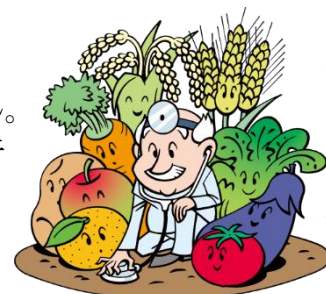
ハーベストオイル（他のマシン油乳剤も可） 50～200倍（発芽前／－）

さらに、ナシマルカイガラムシ対策が必要な場合は、アプロード水和剤1000倍（収穫30日前／2回）を同時散布。

土壌診断のススメ

～土壌診断結果を基にした「土づくり」と「施肥」を始めましょう～

作物は土壌中の養分が多すぎても、少なすぎても健康には育ちません。しかし、土壌の養分状態の良し悪しは見ていただけでは正確に分かりません。土壌診断は「土の健康診断」であり、今の土壌の養分状態を人間の健康診断の様に一目で知ることができます。



土壌診断を行うことで以下のようなメリットがあります！

1. 土壌養分の過不足が分かり、作物の収量や品質が安定・向上するためのヒントとなります。

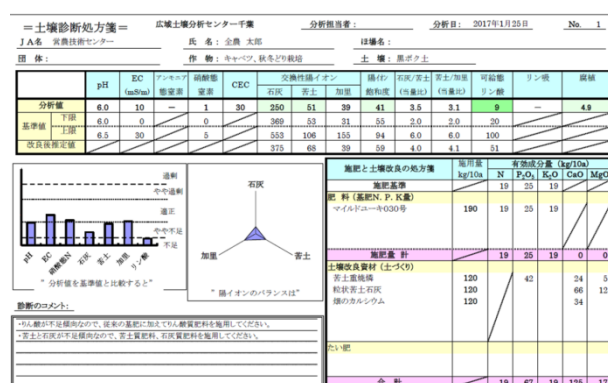
基準より多い養分は減らし、少ない養分は増やすことで、最適な土壌の養分状態・バランスへと近づけ、作物の収量や品質の安定・向上につながります。

2. 土づくり資材や肥料の適切な施用量の目安が分かります。

各資材・養分の施用量の目安が分かれば、目安よりも少なく施用していた場合は従来よりも施用量を増やして土壌養分の不足を補い、過剰に施用していた場合は投入量を少なくすることで、施肥コストを減らすことができます。

3. 地球の環境保全に貢献します。

過剰な土づくり資材や肥料の施用は、土壌への養分の過剰蓄積や地下水の汚染につながる場合があります。土壌診断結果に基づく適正な土づくり、施肥は、環境負荷の低減につながります。



【処方箋レイアウト(一例)】

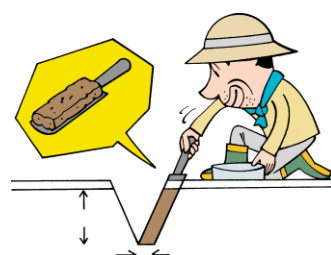
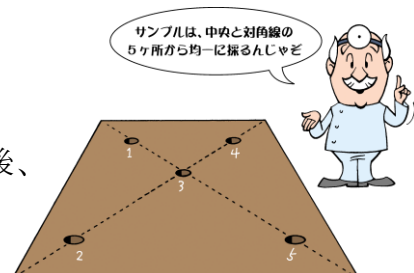
サンプル土壌の取り方＜ポイント！＞

1. 土の取る場所と時期

圃場内中央と対角線の5か所の地点から採ります。採取時期は収穫後、次作の作業に入る前です。

2. 土の取り方

表土1～5cm程度を除いてから、深さ20cmぐらいまでの作土層を均一に移植ゴテで採ります。採取後は他地点の土壌と混ぜ合わせて均一にします。十分な乾燥後に土壌診断用サンプル袋へと入れてください。(サンプル袋等は最寄りJAへお問い合わせください。)



例えばこんな課題を持った農家の方も...

1. 養分不足の例・ネギ

＝土壌診断処方箋＝

広域土壌分析センター千葉

分析担当者：

分析日： 〇〇〇〇年〇月〇日

No. 〇

J A 名

氏 名： 全農太郎

ほ場名： 〇〇

団 体：

作 物： ネギ、秋冬どり栽培

土 壤：

	pH	EC (mS/m)	アンモニア 態窒素	硝酸態 窒素	CEC	交換性陽イオン			陽イオン 飽和度	石灰/苦土 (当量比)	苦土/加里 (当量比)	可給態 リン酸	リン吸	腐植
						石灰	苦土	加里						
分析値	6.4	6	—	1	32	330	35	45	45	6.8	1.8	10	—	5.0
基準値	下限	6.0	0	0		378	54	32	53	2.0	2.0	20		
	上限	6.5	30	5		567	109	159	91	6.0	6.0	100		
改良後推定値						386	55	45	55	5.0	2.9	21		

(1) ネギの土壌診断結果の例です。

露地栽培は降雨による養分流出が多いため、石灰、苦土等の養分が不足しやすいです。

(2) 特にリン酸はネギの初期生育や肥大促進に関わっており、千葉県に多い黒ボク土圃場では不足しやすいです。土壌診断を活用した可給態リン酸含量の測定、適正量の施肥は収量・品質の向上に役立ちます。

(3) また、土壌診断を実施したネギ圃場の多くで苦土が不足傾向にあります。苦土はリン酸の吸収を促進する効果を持つ他、欠乏すると下葉を中心に葉色が薄くなる等の欠乏症が発生する可能性があるため、注意してください。

2. 養分過剰の例・施設栽培

＝土壌診断処方箋＝

広域土壌分析センター千葉

分析担当者：

分析日： 〇〇〇〇年〇月〇日

No. 〇

J A 名 JA〇〇

氏 名： 全農太郎

ほ場名：

団 体：

作 物： トマト、ハウス半促成栽培

土 壤：

	pH	EC (mS/m)	アンモニア 態窒素	硝酸態 窒素	CEC	交換性陽イオン			陽イオン 飽和度	石灰/苦土 (当量比)	苦土/加里 (当量比)	可給態 リン酸	リン吸	腐植
						石灰	苦土	加里						
分析値	6.3	250	—	120	58	1300	270	630	126	3.5	1.0	525	—	5.2
基準値	下限	6.0	0	0		593	85	50	46	2.0	2.0	20		
	上限	6.5	30	5		890	170	249	78	6.0	6.0	100		
改良後推定値						1300	270	630	126	3.5	1.0	525		

(1) 施設栽培でよくみられる土壌診断結果の例です。

ハウス等の施設栽培は雨による流出がない分、養分が蓄積しやすいです。特に堆肥の過剰施肥でこのような事例が発生することが多いため、施用量には注意が必要です。

(2) 塩類(石灰、苦土、加里等の養分)がこれだけ蓄積してしまうと養分の過剰症だけではなく、土壌の塩類濃度が高すぎるため養分が吸えなくなり、欠乏症が発生する場合があります。

(3) 定期的な土壌診断をしながら減肥を行い、施設の状況に合わせて緑肥(クリーニングクropp)や多灌水などで塩類を取り除く・濃度を薄めることをおすすめします。

(4) 施用しすぎた肥料を抜くのは簡単ではありません。早めの対策を心がけてください。

土壌はバランスの悪い施肥設計を1～2年続けても、生育に急激な変化をもたらすことは少ないです。しかし、一度悪化してしまうと正常に戻すまでに長い時間を要します。

ぜひこの機会に土の健康診断を始めませんか？お気軽に最寄りJAまでお問い合わせください

安全な農作物生産の取り組みについて ～改善をつづけるために～

J A全農ちば
営農支援部

1. 安全な農産物生産の取り組みについて

本営農情報集では、1年にわたり『安全な農産物生産の取り組みについて』の情報を掲載させていただきました。消費者の食の安全・安心への関心は依然として高く、生産現場にはリスク管理と改善活動が求められています。食の安全・安心や営農上の様々なリスクについて、今一度取り組み内容を確認し、不十分な点がないか再考してみましょう。

2. PDCAサイクル(Plan・Do・Check・Action)について

食品安全・環境保全・労働安全に関する法令等を遵守し、これらの事項の実施、記録、点検を評価する(PDCAサイクル)ことにより、農業生産における各工程の管理・改善を継続して行うことが出来ます。(生産部会などでは図外側の部会行事等と合わせて行う)



※出典：<http://gap.maff.go.jp/execute/pdca/> 農林水産省 これからはじめる GAP

3. バックナンバーについて

過去に発信した営農情報内容については、下記 HP に公開しております。

公開先：<https://www.zennoh.or.jp/cb/producer/einou/> 【J A全農ちば 公式HP】

※一定期間が経過すると非公開となります。確認したい内容がございましたら営農支援部までお問い合わせくださいませ

5月号：異物混入防止	8月号：農作業事故防止	12月号：農薬・肥料の保管方法
6月号：食中毒防止	9月号：農薬散布記録簿の記入	1月号：燃料の保管方法
7月号：熱中症防止	10月号：農薬散布機の洗浄	2月号：堆肥の管理方法